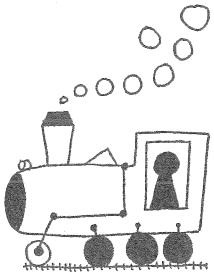
公民館の図書室は　学びの入口・みんなの本棚

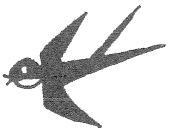
図書室月報

2020年（令和2年）5月5日
第684号

国立市中1−15−1
TEL.042-572-5141
FAX.042-573-0480
国立市公民館



内田百閒（ひゃっけん）著
『第一阿房列車』



宇佐美 理

冒頭近くにこう書いてある。

「なんにも用事がないけれど、汽車に乗って大阪へ行って来ようと思う。」

絶対に今やってはいけないことである。コロナ禍で緊急事態宣言が出ているのだ（2020年4月20日現在）。無闇に出歩いてはいけないことになっている。しかし、いけないと言われると俄然興味が湧いてくる。せめて、本の中だけでも不要不急の旅に出てみたい。

内田百閒（1889-1971）がお供の国鉄職員ヒマラヤ山系氏と阿房列車の旅を始めたのは1950年。その頃は今のJR中央線の線路を蒸気機関車のD51が走っていたということも、本書を読むと分かる。現在でこそ東京から大阪までの移動には新幹線で3時間とかからないが、おそらく当時はもっと面倒なことだっただろう。

ところが、百閒先生（ファンだとどうしても「先生」を付けたくなる。敬意というより親しみを込めて）ときた日には、目的地に用事があるわけではない。そこまで行く手段である列車に乗りたいだけである。当節なら鉄道マニアということで納得できるだろうが、70年前ではよほど酔狂なことだと思われただろう。

これを単に目的と手段の転倒とは考えたくない。カナダの思想家マーシャル・マクルーハンは「メディアはメッセージである」と語った。すなわち、伝わる意味内容よりも、それを媒介する伝達形式の性質のほうが人に大きな影響を及ぼす。百閒先生はそうしたことを実践で示しているようだ。行き先に何があるかは、さほど気にしていない。むしろ、そこへ行って帰ってくる行程のほうに味わいがある。

これは内田百閒の文学全般に当てはまることかもしれない。彼はその作品を通して何らかの教訓や思想を示そうとしたわけではない。初期の幻想的な短編では恐怖や不安が描かれ、『百鬼園随筆』（1933年）以降の作品では笑いの要素が目立ってくるが、大きなテーマを扱うというようなことは決してない。扱うテーマよりも、それを伝える文章の造形に力点が置かれる。何しろ、日本語の表記法が間違っていると思えば、相手が谷崎潤一郎だろうが文部省だろうが批判するのを厭わないほど、厳格なことで知られる作家である。そんな彼の手によって練り上げられた文章は、読み手に繰り返しページをめくらせることになる。

百閒先生はお行儀にうるさい。車中で何か飲み食いするのは「お行儀が悪い」。そのくせ、お酒のこととなるとついつい飲み過ぎてしまいがちなのはご愛嬌だが、自分の理屈に合わないことは絶対にしない。戦時中は殆どの有名作家が動員された日本文学報国会への入会を拒否し、晩年も日本芸術院会員に推薦されながら辞退した。権威や組織に縛られて、意に沿わないことをしたりしたくなかったのだろう。かと言って、あからさまな反骨を標榜するわけでもなく、官僚的な趣味を通そうとしたりする。巻末の解説で伊藤整も書いているように、何より自由なのだ。自分の欲望からも自由であるには、自らを律し、お行儀よくしていなければならない。

外出自粛要請の出されている現状は「戦争」に喩えられることがある。確かにそうしたフシがないこともない。だとすると、どうすることが「反戦」につながるのだろうか。本書の表紙には、東京駅の一日駅長に就任したものの、どことなく気難しそうな百閒先生が写っている。自由というものは、案外そういう表情をしているものなのかもしれない。実際この時の百閒先生は、大好きな列車に乗ったまま、駅長なのに駅を離れてしまったのだった。

（新潮文庫）

講座参考図書

図書室の参考資料コーナーにあります。講座の学びを深めるのに役立ててください。

〈女性の生きかたを考える講座〉

女性のライフデザイン

（講師　新井浩子　ほか）

・主婦とおんな　国立市公民館市民大学セミナーの記録（未来社）
・現代女性の労働・結婚・子育て　橋本俊詔（ミネルヴァ書房）
・子どもからの自立　伊藤雅子（岩波書店）
・フェミニズムの名著50　江原由美子編（平凡社）
・女性の就業と家族のゆくえ　岩間暁子（東京大学出版会）

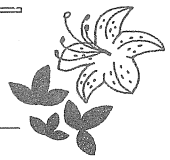
シルバー学習室

（講師　松本キミ子　ほか）

・モデルの発見　松本キミ子（仮説社）
・三原色で描く四季の草花　松本キミ子（日貿出版社）
・続ひろびろ三原色　松本キミ子（ほるぷ出版）
・形とくらしの雑草図鑑　見分ける、身近な280種　岩瀬徹（全国農村教育協会）
・くにたち緑の交響楽　国立植物ガイドブック制作委員会（国立市教育委員会）

〈一節〉

円満字二郎 著『漢字の植物苑』



植物の漢字には、不思議なことがいっぱいあります。

たとえば、「木蘭」は、どう見たって「もくらん」としか読めないのに、どうして「もくれん」と読むのでしょうか。「あんず」と読む「杏」に、「子」を付け足して「杏子」と書いても、やっぱり「あんず」。「子」の読みはいったいどこへ行ってしまったのでしょう。「つつじ」は「躑躅」と書きますが、このむずかしい漢字はそもそもどういう意味なのでしょうか。

こういう不思議を探っていくと、多くの場合、漢字と日本語との長い歴史に突き当たります。

漢字とは、紀元前一五〇〇年ぐらいの昔に、当時の中国語を書き表すため、中国で生み出された文字です。私たちは、それを日本語に書き表すために用いているわけです。

ただ、中国と日本語とは海を隔てて遠く離れていますから、ある漢字が中国語として表すものと日本語として表すものの間には、時にズレが生じます。特に植物のような、それぞれの気候風土と密接に関係するものについては、そういう不一致が多いのです。（岩波書店）

図書室で読める雑誌

〈月刊誌〉
中央公論
文藝春秋
東京人
世界
婦人之友
母の友
教育
月刊公民館
月刊社会教育
社会教育
月刊福祉
きょうの健康
栄養と料理
芸術新潮
アサヒカメラ
音楽の友
山と渓谷
本の雑誌
現代詩手帖
新潮
図書
ちくま
みすず
未来

〈週刊誌・週刊紙〉
AERA
週刊文春
図書新聞
週刊読書人

〈その他〉
婦人公論（月2回刊）
キネマ旬報（月2回刊）
サライ（月2回刊）
ふぇみん（月3回刊）
多摩のあゆみ（季刊）
明日の友（隔月刊）
Chiｏちいさい・おおきい・よわい・つよい（隔月刊）
くらしと教育をつなぐWｅ（隔月刊）
暮しの手帖（隔月刊）

〈外国語新聞〉
東亜日報（ハングル）
人民日報（中国語）
ジャパン・タイムズ（英語）

〈外国語雑誌〉
新東亜（ハングル）
青年文摘（中国語）
読者（中国語）
タイム（英語）
ひらがなタイムズ（日本語と英語）

新着図書から

〈総記〉

モノのはじまりを知る事典　木村茂光（吉川弘文館）031

〈哲学　心理学　宗教〉

日本のイスラーム　小村明子（朝日新聞出版）167

〈歴史〉

〈内戦〉の世界史　デイヴィッド・アーミテイジ（岩波書店）209
建国神話の社会史　古川隆久（中央公論新社）210
武蔵の武士団　安田元久（吉川弘文館）213
アジールと国家　伊藤正敏（筑摩書房）214
関東大震災と中国人虐殺事件　今井清一（朔北社）217
太平洋諸島の歴史を知るための６０章　石森大知（明石書店）270
歴史人口学事始め　速水融（筑摩書房）289

〈社会科学〉

伏魔殿　望月衣塑子（宝島社）312
ヤンバルの深き森と海より　目取真俊（影書房）312
もう１つのアメリカ史　國生一彦（知道出版）316
憲法と日本人　ＮＨＫスペシャル取材班（朝日新聞出版）323
Ｌｅｔ ｕｓ ｔｈｉｎｋ ａｂｏｕｔ Ｋｙｕｊｏ！　奈良勝行（高文研）323
ＳＤＧｓ時代の平和学　佐渡友哲（法律文化社）331
戦時下の経済学者　牧野邦昭（中央公論新社）331
〈格差〉と〈階級〉の戦後史　橋本健二（河出書房新社）361
ＬＧＢＴヒストリーブック　ジェローム・ポーレン（サウザンブックス社）367
ＷＯＭＥＮ女性たちの世界史大図鑑　ホーリー・ハールバート（河出書房新社）367
ひとりひとりの「性」を大切にする社会へ　遠藤まめた（新日本出版社）367え
セクハラ・最後の人権課題　櫛田眞澄（ドメス出版）367く
性風俗シングルマザー　坂爪真吾（集英社）367さ
女性たちの保守運動　鈴木彩加（人文書院）367す
女子の選択　橘木俊詔（東洋経済新報社）367た
若者保守化のリアル　中西新太郎（花伝社）367な
ジソウのお仕事　青山さくら（フェミックス）369
人間としての尊厳　スウェーデン社会庁（現代書館）369
教育・権力・社会　大内裕和（青土社）373
歴史としての日教組　上・下　広田照幸（名古屋大学出版会）374
ことばの教育を問いなおす　鳥飼玖美子（筑摩書房）375
大学の自治と学問の自由　寄川条路（晃洋書房）377
かんもくの声　入江紗代（学苑社）378
生涯学習のグローバルな展開　長岡智寿子（東洋館出版社）379
日本のしきたり英語表現事典　亀田尚己（丸善出版）382

〈自然科学〉

時間という謎　森田邦久（春秋社）421
我々はどう進化すべきか　長沼毅（さくら舎）467
動物に「心」は必要か　渡辺茂（東京大学出版会）481

〈工業〉

英国貴族、領地を野生に戻す　イザベラ・トゥリー（築地書館）519
グレタのねがい　ヴァレンティナ・キャメリニ（西村書店東京出版編集部）519
日本酒の起源　上田誠之助（八坂書房）588
「家庭料理」という戦場　久保明教（コトニ社）596

〈産業〉

ニッポンのサイズ図鑑　石川英輔（淡交社）609
ことわざの生態学　只木良也（丸善出版）650

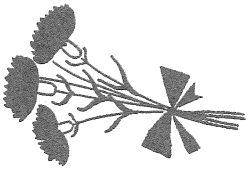
〈芸術〉

茶の本　岡倉覚三（パイインターナショナル）791

〈文学〉

しょぼい生活革命　内田樹（晶文社）91う
踏み跡にたたずんで　小野正嗣（毎日新聞出版）91お
「好き」の因数分解　最果タヒ（リトルモア）91さ
おっぱいエール　本山聖子（光文社）91も

昨年度の図書室利用状況



■昨年度の開室日数は、302 日
■貸出冊数は、22,977 冊
■リクエストの件数は、
　窓口での受付分が　1,601 件
　Web での受付分が　8,337 件
■図書室の蔵書数は、26,541 冊
　（閉架を含む）

図書室のつどい

日本人はどこから来たのか

―サピエンス日本上陸 3万年前の大航海を探る―

講師　海部（かいふ）陽介（国立科学博物館）

3万年以上前、地図もコンパスもない時代に、私たちの祖先はいかにして広い海を渡り、日本列島に上陸したのか。世界最大の海流「黒潮」を、どうやって越えたのか。そういった大きな謎に迫るため、専門家が集まり、命がけの実証航海を行いました。そこには、人類史におけるどのような発見があったのか。実証航海プロジェクトリーダーの海部さんをお招きして、「日本人はどこから、どのようにやって来たのか」その謎に迫り、挑戦の歴史の一端を覗いてみたいと思います。

〈海部さんの本〉『サピエンス日本上陸　3万年前の大航海』（講談社）、『日本人はどこから来たのか？』（文藝春秋）ほか

とき　5月24日（日）　朝10時～昼12時

ところ　公民館　地下ホール

定　員　30名（申込先着順）

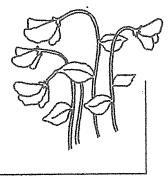
申込先　市内在住者　5月12日（火）朝9時～
　　市外在住者　5月19日（火）朝9時～
　　公民館☎（572）5141

＊新型コロナウイルス感染拡大防止のため、状況により中止とさせていただく可能性がございますので、ご了承ください。

〈私の本棚から　第2回〉

カフカ 著・頭木弘樹 編訳『絶望名人カフカの人生論』

―大久保 芽衣―



私、自分自身にそこまで不満はありません。それなのに、よく他人を羨むのです。例えば「やりたいことを見つけて、死ぬほど努力する」前向きな人であったり、「周囲の反対を押し切って一人でもやり遂げる」芯のある人であったり。羨んで妄想するだけで自分自身を変える気力は無いのですが。夢を語れるほどの将来への渇望も無ければ、敷かれたレールから飛び降りる強さもありません。無意味な羨望と漠然とした自己嫌悪。この纏わり付くような失望感は何なのだろうと思いつつも、所詮は無視すれば生きて行ける程度の自分の弱さです。向き合うのも心底無駄に思え、少し経てばそんな気持ちなど無かったかのように日常へ戻ります。

しかしカフカは、そうやって多少躓いたときでさえ、なんとも無いフリをして立ち上がることができません。彼は言います。

「将来にむかって歩くことは、ぼくにはできません。将来にむかってつまずくこと、これはできます。いちばんうまくできるのは、倒れたままでいることです。」

前に進まないということは、弱くて惨めな自分と向き合わされ続けるということであり、精神的ダメージも大きいでしょう。それでもカフカは倒れたままで居ざるを得ないのです。倒れたまま、彼は一生をかけて考え続けます。人々が未来へ新たな世界へと駆け出す中で、ただ一人孤独に、過去へ内側へと。

「人生論」と銘打つこの本ですが、中身は決して読者に対して人生を説き、指図するものではありません。なぜならカフカには他人など見えていないのですから。載っている言葉の殆どがカフカによるカフカ自身への絶望です。それはもう、見ていて可哀想になるくらい徹底的に絶望します。もともと不特定多数の読者を想定した文ではないため、読者は彼が絶望して倒れている様をただひたすら眺めることになるでしょう。しかしその妙な疎外感が心地良いのです。自分よりパニックになっている人が横にいると、かえって冷静になるあの感じに似ているかもしれません。そうして余裕が出てくると、自分ではもう麻痺して感じなくなっていた心の痛みをカフカが拾ってくれているような気がしてきます。あまりの絶望具合に苦笑いしつつ、自分の弱さをも肯定されているような気すらしてきます。今にも転びそうになりながら後をついてくる幼い弟の手を引きつつ、心配になってちょっと振り返るような、どこか懐かしい、愛しい気持ちがしてくるのです。（新潮社）

係から

5月14日（木）のブッククラブは、新型コロナウイルス感染症拡大対策のため延期となりました。やわらかな緑が眩しい季節になりました。本を片手に、一息ついてみませんか。